

女の幕ノ内弁当

田辺聖子



女の幕ノ内弁当



田辺聖子

女の幕ノ内弁当

昭和五十九年九月一日 第一刷

定価九五〇円

著者 田 辺 聖 子

発行者 西 永 達 夫

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町三十二
電話 (〇三) 二六五・一二二一

印刷 共 同 印 刷

製本所 加 藤 製 本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

© Seiko Tanabe 1984

Printed in Japan

女の幕ノ内弁当／目次

二番手

どっちかといえは

諸人のたのしみ

アホに定年なし

若葉ツアー

愛される丸干し

ハロスヌ

飽いていいとも

OSAKA 2001

日本橋方丈記

華麗なる転身

9

14

19

24

29

34

39

44

49

54

59

女房もつなら	64
ドッグ・ポスト	69
才あてごっこ	74
面白うてフシギな本	79
オトナ	84
キングコング	89
女のシングルライフ	94
私とクラシック音楽	99
今年の夏	104
主婦の休暇	109
地球のエイズ	114

オトナ道

トレパン忍者

初秋の城下町

どんでん

それはそれとして

御堂筋のパレード

波風たたぬ夫婦

男の子・女の子

兵馬俑の男たち

本音とは

女は走る

169 164 159 154 149 144 139 134 129 124 119

ムラムラッ

「大阪の一夜」賞

とりこみ主義

大きいこと小さいこと

新潟三区

恰好わる

みな抛^はかしなはれ

長生きのヒケツ

きさらぎ酒場

モジリアニと小染

居直り

224 219 214 209 204 199 194 189 184 179 174

十億の……

見ぬもの命長し

スポーツもどき

長生きのヨイシヨ

たもれ

推理小説のたのしみ

飲み場所

このごろの生きていく私

229

234

239

244

249

254

259

264

女の幕ノ内弁当

装幀・装画／高橋
A D／花村
広 孟

二番手



数日、東京にいる。新幹線に乗って幕ノ内弁当を食べて東京へやってくる。新大阪駅の幕ノ内弁当を買うが、この弁当につき、

「あれは値段にかかりませんな」

という人がある。

「八百円より、六百円のがよろし。高けりや美味い、というもんでもない」

「いえてる」

私も東京駅から大阪へ帰るときは、駅の幕ノ内は東京風な濃味の味つけがせつないので、大丸の地下へいって弁当を買う。この際、千五百円などという、松竹梅のクラスでいえば特・松というようなものがあるが、これはあまりに「凝りすぎ」。次かその次がいい。

(何たってこの……二番手、三番手、というのが実質的でいいな)

と思いつつ、私は弁当を食べる。

(二等とか、二次会とか、次長とか、二の膳とか、二次募集とか、二度目の結婚とか、……講演でも、二番目にやると、心理的にラクだし、な。日本第二の都会、なんてあたりが生きやすいかもしれない、大阪なんてのは)

さて、日本第一の都会・東京へつき、またもカン詰になって仕事をしていた。花はまだ咲かず冷い雨である。仕事のあいまいに、博品館劇場へ「上海パンスキング」を観にゆく。たのしく面白く観て、串田和美サンも吉田日出子サンもすてきだったが、東京の若い子はお芝居が好きだなあ、と痛感した。お芝居と漫才は都会のもの、というのがいつもの私の考えなのだけど、漫才はともかく、大阪の若い子が、これだけお芝居に集まるかしらん。アングラも大阪はいつも素通りして、むしろ神戸の若者をアテにしているもの。

でも、大阪はちよつとずつ変っていきう、というので、このまえ、「山片^{やまがたばんどう}蟠桃賞」というのを大阪府が設けたが、その第一回の受賞者がドナルド・キーン先生にきまった。

きまった、というより、審査委員のお一人の司馬遼太郎氏のお言葉を借りると、「受けて頂くように切に願ひする」というもの。

これは、日本文化を海外に紹介した人と、その著作業績が対象となっている。山片蟠桃はいうまでもなく近世大阪の優れた町人学者である。

キーン氏は快く受けて下さり、三月六日の授賞式に出席なさった。この賞は賞状と、副賞三百

万円ということになっている。当日はキーン先生の記念講演がある。

キーン氏はまず「受賞は光栄である」とのべられ、

「私がこれからますます日本の研究をするよい刺激になると思う。賞金は次の世代の日本研究家のために使いたい」

といつていられた。受賞作は「WORLD WITHIN WALLS」(「壁の中の世界」訳題は『日本文学史近世篇』中央公論社刊)である。

キーン先生の講演は流暢で柔軟な日本語で行なわれたが、力強く熱のこもったものだった。海軍の日本語将校だった二十歳のころからの、四十年にわたる日本と日本文学への思いをユーモアこめて話される。記念講演といっても固苦しいものではない。私はじめ、数百人の市民の聴衆によくわかるような言葉で、論旨明白で、しかも情熱的である。満場、しーんと聞いていると、「真珠湾にいたとき、日本語翻訳に従事していましたが、あるとき係りの上官が、『日本軍の新しい暗号らしい、大急ぎで解説してくれ』と一枚の紙を持ってきました。見ると尺八の譜面でした」などといわれたりして、じつに緩急自在、欧米人のスピーチの質のよさの見本、というものを、日本語しか分らない私たちに示して下さったわけで、これだけでも、大阪の文化水位がすこし上がったといってもいいだろうか。

終ってパーティがあつたが、キーン先生は一九五三年から五五年まで京大に留学されているので、その折の知人を招んでいられた。寄宿先の奥さんや知己の坊さんらが来られて和やかな会で

あった。

ソ連の領事のアニシモフさんもパーティに出ていられて、

「こんな文化的なパーティは、大阪ではじめてとちがいますか」

といわれていた。この人も日本語は達者であるが、アニシモフさんはお酒は入ってるし、大声で、誰かれとなくつかまえては、

「大阪ではじめてです。文化人、こんなにたくさん、はじめて見ました。はじめてのパーティ」

「ほんまです、いや、そういわれるとナンですが、まあ、そうですね」

と大阪府の役人たちはあたまをかき、アニシモフさんは尚も、

「今まで経済の人のパーティ、政治の人のパーティ、そういうのばかりですね、大阪でこれ、はじめて」

「ハイハイ、わかりましたがな」

山片蟠桃の主家・升屋のご子孫の方もパーティに出席されていて、それも古い浪華の町らしい花やぎである。よい授賞式であった。

キーン先生は、せっかく海外への日本文化紹介に情熱をかたむけて下さるのだから、私のほうは、大阪を舞台に恋愛小説でも書いて、新しい浪華情緒でも紹介し……と思いかけてふと心配になり、カモカのおっちゃんに聞いてみる。

「男の人も恋愛小説を読むでしょうか」

「読みまへんなあ」

とおっちゃんは二べもない返事。

「うーん。じゃ私が文化的に貢献できることは、ほかにあるかなあ」

「ミナミで飲んでるのが、人間、いちばん文化的でっしゃろ、大阪ではこれがいちばん」

ミナミへいったら相合橋は工事中、三津寺筋のバーで、客が、

「ミナミも芸者はんが少のうなッて」

などとしやべっていて、外は早春の夜風が冷い。恋愛小説をかくのは二番手の仕事なのか、いやでもまあ、たのしみは二番手にあり。

どっちかといえば



「良妻賢母」根強い日本、

は朝日新聞。

「大和なでしこ」健在」

は毎日。

どちらも四月四日の記事。総理府が三日付で発表した、「婦人問題に関する国際比較調査結果」である。

日本の女性、これで見ると、家庭生活では「男性が優遇されている」(66・8パーセント)と考えつつも「女性は結婚したら、自分自身のことより、夫や子供など家族を中心に考えて生活した方がよい」(72パーセント)と思い、「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしくしつけた方がよい」(62・6パーセント)という方針で、だから男の子の教育は「大学以上」(73パーセント)、女の子は「短大、高校」(55パーセント)でよいと思う。「夫は外で働き、妻